

物語文学における「あざやか」な人物たち

— 『源氏物語』を中心に —

馬 如慧

一、はじめに

現代において「あざやか」という言葉は、花や服などが視覚的に色とりどりで鮮明であるさまを表すと解される例が多いただろう。その一方で、「あざやかな手つき」などというように、処置、腕前などの見事さを表す場合もあるが、人の性格を形容することはまず稀である。古典の世界においても、『源氏物語』以前では、装束や調度品を形容することに用いられ、多くは晴れの場におけるものの色が鮮明で際立っており、華やかで麗しいことを表している。しかし、『源氏物語』を境に、「あざやか」という言葉は装束や調度品だけではなく、人物への形容にも用いられるようになる。また、「あざやぐ」という動詞も用いられ始める。さらに興味深いのは、人の心性を表す例まで見いだされる点である。それは、人物造型にも大いに関わっているが、先行研究においてこの点はまだ論及されていないようである。本稿では、『源氏物語』における「あざやか」（ならびに「あざやぐ」という言葉と人物造型との関係を考察するとともに、その後の物語作品における用いられ方をもとらえてみたい。

二、「あざやか」（「あざやぐ」）に対する従来の理解

『角川古語大辞典』⁽¹⁾における「あざやか」の語義は、次のように示されている。

- ① 視覚的に言って鮮明であるさま。はっきりして、うるわしい。水際立つ

た様子である。

② 質的に、価値判断を込めて、際立っているさまをいう。すっきりしている。

③ 魚の生きのよいさま。

これ以外の古語辞典などを確認してみても、特に「あざやか」が人物の性格を形容するときの意味については一切注目していないようである。また、同辞典の「あざやぐ」の項には、「あざやかである、の意から、その度が過ぎて荒け立つ」と説明されている。しかし、『源氏物語』に見られる用例に照らすと、後にとりあげるように「あざやぐ」という語のニュアンスと「あざやか」とはほぼ同様であるため、同意しがたい。また、『古典基礎語辞典』⁽²⁾における「あざやか」の項の「参考」では、筒井ゆみ子氏が、「アザヤカで示されるような事柄は、強烈なものや露骨を好まない中古の美意識には本質的に反するものであって、第一等の価値は表しえない。人物についても、『源氏物語』などでは皇族には用いられず、頭中将・夕霧・その六の君などの一つ格下の筋に複数の例が見られる」と指摘しており、示唆的である。しかし、『栄花物語』において、「あざやか」を用いて皇統の人々を形容する用例が確認できるため、この説明は平安時代の用法に関して必ずしも妥当とはいえないように思われる。

さて、「あざやか」に関する先行研究も比較的少なく、筆者の調べた限り、真正面からとりあげたものとしては、中西良一氏と武山隆昭氏のやや古い論文二本と、池田節子氏の論文一本しかない。中西氏は、「あざやか」は容姿・衣裳等の華麗・鮮麗・新鮮、および態度・性格等の明朗・端直の面を持ち、その意味において美的なるもの、よきものを指す⁽³⁾と唱え、武山氏は、「あざやか」の語義をつらぬく、根本的語義（原義）は、「鮮明さ」という概念であると思う。「けざやか」の「明瞭さ」よりも、新鮮さ・華やかさ・積極性の加わった語感である⁽⁴⁾と指摘する。これらの二本の論文はともに、「あざやか」と「けざやか」などの言葉の比較に重点を置いているようである。一方、池田氏は、「夕霧は、「あざやか」な面では、光源氏より上だといわれており、「あざやか」と

いう形容が五例（直衣・直衣姿の形容以外）もある。女樂の場面における「あざやかなる御直衣」も、単に直衣が新しいことをいうものではなく、男性的で有能な官吏としての彼を示しており、光源氏とは異質のタイプの男性として女樂の場面に登場しているといえよう⁽⁵⁾と指摘し、夕霧の性格を形容する際に「あざやか」が用いられたことを捉えているが、それはあくまでも衣装の考察を主眼とする論考である。また、池田氏は人物の性格をあらわす「あざやか」の影響をうけての「衣装のあざやかさ」という捉え方をされているようであるが、『源氏物語』以前の用例のあり方から推察すると、装束を表す「あざやか」の語義の延長として人物の性格を形容する「あざやか」があると思われる。

三、『源氏物語』において人物を形容する「あざやか」

『源氏物語』以前に見られる「あざやか」の用例を一通り見ていくと、管見の限りでは、上代では見つからず、『源氏物語』以前の平安時代では、『うつほ物語』（6例）、『落窪物語』（1例）、『枕草子』（16例）というように散見される。これら平安時代の23例では、ほぼ装束や調度品を形容することに用いられ、多くは晴れの場における装束や調度品の色が鮮明で際立っており、華やかでうるわしいことをいう（その他としては花の形容が『枕草子』の1例のみ見られる）。装束を形容する場合、多くは参内の時または宴会・行事の時の殿上人、あるいは礼装の女房の装束で、要するに公的な場における晴れ装束である。人の様子や性格に用いた例は見当たらなかった。また、「あざやぐ」という動詞の形も見られなかった。

さて、『源氏物語』になると、「あざやぐ」という動詞の形が用いられるようになった。『源氏物語』における「あざやか」（あざやぐ）の用例は全部で37例あり、そのうち「あざやか」の形で33例、「あざやぐ」の形で4例ある（なお、「柏木」巻の「あざやかなる方のおぼえ薄らぐ」という箇所が、河内本系統及び御物本では「あさやきたるかたのおほく」とあるため、「あざやか」が32例、「あざやぐ」が5例とも数えられる）。また、『源氏物語』になると、「あざやか」と

いう言葉は装束や調度品だけでなく、人物の顔立ちや動作、ひいては人物の性格を形容するというように、幅広い範囲で用いられるようになった。その用例を、以下に挙げたい。

(一) 正篇において男性人物を形容する場合

以下に掲げる本文1～3は、頭中將についての用例である。

【本文1】「葵」（光源氏と頭中將、故葵上を偲ぶ）（p.54）

時雨うちしてもものはれなる暮つ方、中將の君、鈍色の直衣、指貫うすらかに更衣して、いとををしうあざやかに心恥づかしきさまして参りたまへり。君は、西のつまの高欄におしかかりて霜枯れの前栽見たまふほどなりけり。（中略）近うついるたまへれば、しどけなううち乱れたまへるさまながら、紐ばかりをさしなほしたまふ。これは、いますこし濃やかなる夏の御直衣に、紅の艶やかなるひきかさねてやつれたまへるしも、見ても飽かぬ心地ぞする。

【本文2】「少女」（内大臣、娘雲居雁と夕霧の恋仲を知る）（p.40）

「大宮をも、さやうのけしきは御覧ずらんものを、世になくかなしくしたまふ御孫にて、まかせてみたまふならん」と、人々の言ひしけしきを、めざましうねたしと思すに、御心動きて、すこしををしうあざぎたる御心には、しづめがたし。

【本文3】「柏木」（致仕大臣、柏木を偲ぶ）（p.334）

うちひそみつづぞ見たまふ御さま、例は心強うあざやかに誇りかなる御気色なごりなう、人わろし。

本文1は、「葵」巻において、葵上が亡くなった直後に左大臣邸で服喪する光源氏を、頭中將が見舞う場面である。この場面において、「ををしうあざやか」に登場する頭中將と対照して、「しどけな」くなまめかしい光源氏の姿がクローズアップされている。本文2では、娘の雲居雁の入内を図ろうとする内大臣（頭中將）が、娘とまだ官位の低い夕霧との恋に気付くと、この上なく不愉快に思う。この文脈からは、頭中將の「ををしうあざぎたる」心は、雲居雁の入内

—つまり自分の政治上の野望と何らかの繋がりがあるのではないかと考えられる。本文3は、柏木が亡くなったのちの、父致仕大臣（頭中将）の状態であるが、もともとは心強くあざやかな人だったのに、そんな気配もなくすっかり減入ってしまったとされている。ここからは、「あざやか」は晴れ晴れとして陽気な状態を形容するように思われる。

本文4は、鬚黒が玉鬢のところに出かけようとするときの凛々しい姿である。

【本文4】「真木柱」（鬚黒の凛々しい姿）（p.365）

なつかしきほどに萎えたる御装束に、容貌も、かの並びなき御光にこそ圧さるれど、いとあざやかにををしきさまして、ただ人と見えず、心恥づかしげなり。

ここは語り手の評価であり、光源氏を意識しながら「あざやかにををしき」鬚黒を造型しているように見える。

以下に掲げる本文5～8は、夕霧についての用例である。

【本文5】「藤裏葉」（内大臣、夕霧をめでの）（p.436）

なほ人にすぐれて、あざやかにきよらなるものから、なつかしうよしづき恥づかしげなり。（中略）内大臣「のぞきて見たまへ。いと警策にねびまさる人なり。用意などいとしづかにもものしや。あざやかにぬけ出でおよすげたる方は、父大臣にもまさりざまにこそあめれ。かれはただいと切になまめかしう愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中忘る心地ぞしたまふ。公さまは、すこしたはれて、あざれたる方なりし、ことわりぞかし。これは才の際もまさり、心用るををしく、すくよかに、足らひたりと世におほえためり」などのたまひてぞ対面したまふ。

【本文6】「藤裏葉」（冷泉帝と夕霧の様子）（p.462）

御容貌いよいよねびととのほりたまひて、ただ一つものと見えさせたまふを、中納言さぶらひたまふが、ことごとならぬこそめざましかめれ。あてにめでたきけはひや、思ひなしに劣りまさらん、あざやかににほはしきところは添ひてさへ見ゆ。

【本文7】「柏木」（夕霧、一条宮を訪問）（p.329）

あざやかに気高きものから、なつかしうなまめいたり。

【本文8】「夕霧」（夕霧、花散里・光源氏と対面）（p.471）

鬼神も罪ゆるしつべく、あざやかにもの清げに若う盛りにほひを散らしたまへり…

本文5は、「藤裏葉」巻において、夕霧を婿として迎えた頭中将が、夕霧をみて、その父光源氏と対照させながら称賛する場面である。ここでは、「あざやか」が、「ををし」「警策」「およすげたる」などの言葉と一緒に用いられて夕霧を形容し、学問のことも特に強調されている。また、本文1、2、4と5は、「あざやか」と「ををし」が近接して用いられる用例として特徴づけられる。「あざやか」が男性を形容するときは、どうやらその男性性を強調しており、同時に政治上の手腕や漢学の教養などと関わっているようである。

本文6は、六条院の宴における冷泉帝と夕霧の様子である。ここでも、冷泉帝と夕霧との対照的描写に注目したい。「あてにめでたき」気配は帝のほうがまさっているが、「あざやか」な面では夕霧のほうがまさっているとされている。本文7は、「あざやかに気高きものから、なつかしうなまめいたり」と夕霧の気品を形容しているが、「ものから」は逆接なので、「なつかしうなまめいたり」という性質とは対照的な「あざやか」さ、また「気高」さということが示されている。本文8では、「あざやかにもの清げに若う」と夕霧を形容している。一見したところでは「あざやか」が夕霧の顔立ちを表しているようにみえるが、夕霧の性格をも仄めかしていると考えられそうである。

本文9は、「若菜上」巻において、朱雀院が光源氏を称賛する場面である。

【本文9】「若菜上」（朱雀院、夕霧に意中を仄めかす）（p.26）

朱雀院「……うるはしだちて、はかばかしき方見れば、いつくしくあざやかに目も及ばぬ心地するを、またうちとけて、戯れ言も言ひ乱れ遊ばば、その方につけては、似るものなく愛敬づき、なつかしくうつくしきことの並びなきこそ、世にありがたけれ……」など、めでさせたまふ。

『源氏物語』において、「あざやか」を用いて光源氏を形容するところはここしかないが、特に「うるはしだちて」と強調しており、いつもの光源氏と対照的な公的な性格を帯びた様子を表している。

本文10は、柏木が亡くなった後に、夕霧が一条宮を訪問し、落葉宮の母御息所と対面する場面である。下線部で、夕霧は亡き柏木のことに言及している。

【本文10】「柏木」（夕霧、一条宮を訪問）（p.332）

大将も、とみにえためらひたまはず、「あやしう、いとこよなくおよすげたまへりし人の、かかるべうてや、この二三年のこなたなむ、いたうしめりてもの心細げに見えたまひしかば、あまり世のことわりを思ひしり、もの深うなりぬる人の、澄み過ぎて、かかる例、心うつくしからず、かへりてはあざやかなる方のおほえ薄らぐものなりとなむ、常にはかばかしからぬ心に諫めきこえしかば…」

この本文では、「あざやかなる方のおほえ」において諸本に異同があり、特にもっとも尊重される定家本「柏木」巻（尊経閣文庫蔵）では「あざやかなるかたのおほく」となっている。しかし、「宿木」巻に「なまおほえあざやかならぬや」の用例が確認できるため、やはり「おほえ」のほうが妥当かと思われる。さて、「あざやかなる方のおほえ」とはどういう意味か。これについてはかなり難解であり、古注釈でも大きく意見が分かれている。そのうち、『花鳥余情』などのように、「あざやか」とは澄んだ心、つまり道心が堅固であると解する説が主流であると思われる。しかし、『萬水一露』が示す、「あさやかとは心のはえしき事也さやうに物を觀し過したる人ははえしき方もうすく成物そと常に夕霧の柏木をいさめしと也」⁽⁶⁾という見解を筆者としては支持したい。道心が深まると、俗世界との関わりが薄くなり、政治的な関心もなくなってしまうものである。特に、「おほえ」というのは世評という意味で、ここでははなやかで政治的に抜きこんでいるという柏木の評判が下がっていることを表しているのではないかと思われる。

さて、先の本文5と8のように、特に夕霧を形容する場合、「あざやか」はそ

の顔立ちなどを形容しており、さらにその延長として、彼の気立てを表しているように見える。『訓点語彙集成』⁽⁷⁾における「あざやか」の項を見てみると、「鮮」「浄」「儼」「尠」「潤」「燦」「蒨」「明」などの漢字が、「あざやか」と訓釈される例が確認できる。特に「蒨」については興味深く思われる。『大慈恩寺三蔵法師傳』巻九に、「今魄照初環満月之姿盛矣萸枝再長如蓮之日蒨兮」とあり、その興福寺蔵本承徳三年の訓点では、「蒨兮」を「アザヤカナルカナ」と訓釈している。石田茂氏⁽⁸⁾の研究によれば、『大慈恩寺三蔵法師傳』は、『正倉院文書』で五回言及されるほど古代日本でのある程度の流布が想像される。あくまでも可能性ということだが、紫式部の父為時のもとにも存在していたかもしれない。また、『康熙字典』⁽⁹⁾では、「蒨」の意味を「鮮明貌」というようにを示しており、顔立ちがあざやかであることを表すという。その用例として、『文選』⁽¹⁰⁾における束皙の詩「補亡詩六首」に「蒨蒨士子涅而不渝善曰蒨蒨鮮明之貌論語子曰白乎涅而不緇渝變也」が挙げられ、男性文人の容貌があざやかであるとされている。なお、唐の時代の楊炯の詩「送徐録事詩序」⁽¹¹⁾に「徐学士風流蒨蒨容貌堂堂」という一句があり、ここでも男性文人を形容しているが、「風流蒨蒨」とあるため、古代中国では、容貌の延長として、気立てについて表す「蒨」の用い方があるのではないと思われる。そして、「蒨」という漢字は、日本の古辞書『新撰字鏡』⁽¹²⁾（892年頃）巻七と『類聚名義抄』⁽¹³⁾（1100年頃）「僧上」巻に確認できる。男性文人や官吏の顔立ち、ひいては性格を形容するときに用いられるこの「蒨」が、古代日本では「あざやか」と訓釈され、さらにそのことが『源氏物語』における「あざやか」な男性像の造型と何らかの関わりをもっているのかもしれないが、ここでは参考程度に指摘しておく。

(二) 続篇において女性人物を形容する場合

一方、『源氏物語』の続篇に入ると、「あざやか」が人物を形容する場合、男性にも一部で使われてはいるが、主に女性に用いられるようになっている。それらの例として、次の本文11～13がある。

【本文11】「竹河」（蔵人少将、姫君を垣間見る）（p.75）

姫君はいとあざやかに気高ういまめかしきさましたまひて、げにただ人にて見たてまつらむは似げなうぞ見えたまふ。（中略）、愛敬のこぼれ落ちたるやうに見ゆる、御もてなしなどもらうらうじく心恥づかしき気さへそひたまへり。

【本文12】「宿木」（匂宮、六君と一夜を過ごす）（p.405）

人のほど、ささやかにあえかになどはあらで、よきほどになりたひたる心地したまへるを、いかならむ、ものものしくあざやぎて、心ばへもたをやかなる方はなく、もの誇りかになどやあらむ……

【本文13】「宿木」（匂宮、六君に魅せられる）（p.420）

いはけなきほどならねば、片なりに飽かぬところなく、あざやかに盛りの花と見えたまへり。（中略）ただ、やはらかに愛敬づきらうたきことぞ、かの対の御方はまづ思ほし出でられける。

本文11は、夕霧の子蔵人少将が鬚黒と玉鬘を両親とする娘たちを垣間見る場面であるが、大君は「あざやかに気高」く見える。特に「げにただ人にて見たてまつらむは似げなうぞ見えたまふ」の一句は、先に掲げている本文4、すなわち大君の父である鬚黒の描写「いとあざやかにををしきさまして、ただ人と見えず」を想起させる。本文12は、匂宮が想像する夕霧の娘六の君の気立てである。六の君は「あざやぎて」とされ、その直後に、「心ばへもたをやかなる方はなく」ともあるので、やはり「あざやか」なる女性は女性性が乏しいものと考えられる。また、本文13は、匂宮が六の君を愛でて、宇治の中君と対照させる場面である。六の君は「あざやか」だが、それに対して中君は「やはらかに愛敬づきらうたき」さまである。

以上のように、『源氏物語』の続編になると、女性が「あざやか」とされることもあるが、それも鬚黒の娘大君と夕霧の娘六の君に集中している。そこからは父から娘への性質の継承が見られるのではないかと思われる。そしてまた、女性が「あざやか」とされるときには、やはり女性性の乏しいこと、つまり「た

をやか」でないことや、「やはらか」でないことが強調される。

四、『源氏物語』における対照的な男性群像

これまでに引用した本文1・4・5・6のように、『源氏物語』において、「ををし」く「あざやか」な人物たちを描くときには、「なまめかし」く「なつかし」き人物たちと対照しながら語っていることが多い。鈴木一雄氏は、「対照・並立」と「ゆかり」の構成を、作中人物の相互関係における二つの傾向として捉えているようである。氏は、「対照・並立の人物対位は、“双称法”とか“二人づれ”とか呼ばれて、『源氏物語』の特色ある人物描法の一つとしてしばしば論じられている。たとえば、光源氏に対する頭中将、夕霧に対する柏木、薫君に対する匂宮といった主人公たちの配置からだけでも納得がゆくように、『源氏物語』の主人公たちは“二人づれ”で歩いてゆくのである」¹⁰と指摘している。確かに、光源氏と頭中将、光源氏と夕霧、夕霧と柏木などの対蹠的描写が二人一組でなされていたことは間違いないが、『源氏物語』の作者は、それ以上に、頭中将・夕霧・鬚黒のグループと光源氏・柏木・朱雀院・冷泉帝のグループといった男性群像の対照をも図っているのではないかと思われる。

下の表1は、頭中将たちのグループを描く言葉と光源氏たちのグループを形容する言葉を人物ごとにまとめたものである。数字は用例数を表す。

なお、表1には、形容する言葉が打ち消される用例を数の内にいれていない。また、本文10の「あざやかなる方のおぼえ薄らぐ」という柏木に関する一例も微妙なので、カウントしていない。

表1からは、「ををし」や「あざやか」などとされる男性群像と、「なつかし」や「なまめかし」などとされる男性群像がはっきりと分かれるような用例のあり方が確認可能であろう。頭中将・夕霧・鬚黒のグループに用いられる形容は男性性を強調する傾向があり、より堅く近づきにくい雰囲気醸し出している。それに対して光源氏や柏木のグループに用いられる形容は女性により多く用いられる傾向があり、柔らかくて近づきやすいイメージを与えている。

表1 対照的な男性群像と形容する言葉の関係

朱雀院	冷泉帝	柏木	光源氏	鬚黒	夕霧	頭中将	
				2	3	3	ををし
			1	1	4	3	あざやか
				1	4	3	すくよか
		1			4		およすぐ
					1	4	はなやか
					2		警策
						3	きらきらし
6	2	3	24		2		なつかし
		2	8				愛敬
9		4	21		3		なまめかし (なまめく)
1	1						ゆゑゆゑし

なお、同じく「ををし」や「あざやか」とされるグループのなかでも、頭中将については特に「はなやか」や「きらきらし」の性質が強調され、藤原摂関家の権威者としての派手な性格が浮き彫りにされている。それに対して、夕霧は、「警策」で「およすぐ」であるところが強調され、老成していることが重んじられている。しかも、光源氏の子であるゆえか、光源氏のグループによく用いられる「なつかし」と「なまめかし」も用いられているが、それも、「あざやかに気高きものから、なつかしうなまめいたり」などのように、「あざやか」である点が強調されている中で用いられている。

一方、光源氏たちのグループでは特に人物ごとに明確な特徴が現れていないようにも見えるが、柏木を除けばみな皇統に属する人たちであることが注目される。しかし、先に掲げている本文10で夕霧が発言しているように、柏木の場合は「あざやか」という評判が薄らぐように、その人物像が一貫していないことが示されている。玉鬘十帖で登場する柏木には、さほどの際立った性格が語られず、女三宮密通事件で、恐らく物語の中では、夕霧以上に光源氏という〈父〉と対立する息子の役目を果たしているので、その人物造型も、光源氏側に

引き寄せられた面があるかもしれない。この柏木の場合を外してみると、二つの男性群像の対立は、皇統の人々と臣下の人々の対立にもなりうると思われる。

五、『源氏物語』を除く王朝物語における「あざやか」

『源氏物語』以後の王朝物語においても、「あざやか」が人物を形容するような用例が確認できる。そして、概ね『源氏物語』における「あざやか」の用い方を受け継いでいるように見える。

【本文14】『夜の寢覚』巻一 (p.55)

頭つき、様体いときよげにて、あざやかに気高く、きよらなるかたち、もてなし、有様も、心恥づかしげに……

【本文15】『夜の寢覚』巻一 (p.116)

女房、童、はなばたと化粧じて、あまたことどころにうち群れつつ、(中略)上ぞ、いと気高く、ものあざやかに、きよげなるさまして、さしも心地よげならず……

【本文16】『とりかへばや物語』巻第一 (p.196)

宰相はいとそそろかにををしくあざやかなさまして、なまめかしうよしあり色めきたる気色、いとをかしう見ゆ。中納言は、はなばたと見れども見れども飽くまじう、にはほはしくこぼるばかりの愛敬似るものなきに、もてなし有様も、さは言へどなごやかにたをたをといとなつかしきほどの、人にこよなくすぐれて目もあやなるを…

【本文17】『狭衣物語』巻三 (p.46)

帝はただ国王とて、あざやかにらうらうじうもおはしまさず、さばかりなまめかしう恥づかしげなる御ありさまに……

本文14と15は、『夜の寢覚』における大君に用いられる用例である。特に「あざやか」が「きよげ」と「気高し」と近接しているという用いられ方は、『源氏物語』の影響をかなり受けていると見てよかろう。そして、直接対照するよう

な描写こそないものの、「いと気高く、静やかにはあらず、いとまことにうつくしう、たをやかなるけはひ、有様の、似るものなきはや」とされる中君に比べてみると、小学館新編日本古典文学全集の頭注が「寢覚の上の美の特徴が「うつくし」「たをやか」に示されている。かつての大君との、今の女一の宮との対照的な「女らしさ」である」¹⁵⁾と指摘するように、やはり対蹠的である。

本文16は、『とりかへばや物語』における用例である。宰相中将は姫君の友人であり、男装した姫君と比べれば、「ををしうあざやか」で男性性が鮮明な美質の持ち主である。それと対照的に、中納言、つまり男装した姫君は「なつかし」く「愛敬」に充ちており、なによりも「たをたを」としていて、いかにも女性性が際立つ男性美を持っていた。そして人々は中納言の方を称賛しているという。「あざやか」が「ををし」と近接して男性人物を形容するとともに、その人物が「愛敬」のある「なつかし」き人物と対照的に描かれるというパターンは、明らかに『源氏物語』の影響を受けている。

本文17は、『狭衣物語』における帝を形容する用例である。帝が「あざやか」ではなく、「なまめかし」とされているところは、いかにも『源氏物語』における帝たちの形象を受け継いでいるように見える。

しかし、同じく『源氏物語』の影響を受けているものの、『栄花物語』では、帝を造型するときに『源氏物語』と異なる「あざやか」の用い方を示していることが大変興味深い。

【本文18】『栄花物語』 卷第八「はつはな」(p.428)

かくて若宮のいとものあざやかにめでたう、山の端よりさし出でたる望月などのやうにおはしますを、帥殿のわたりには、胸つぶれいみじうおぼえたまひて……

【本文19】『栄花物語』 卷第三十九「布引の滝」(p.481)

一院いとあざやかにすくすくしく、人に従はせたまふべき御心にもおはしまさざりしかば、関白殿、え御心にもまかせせたまはずなどありしかど……

本文18では、中宮彰子の子供で、後の後一条天皇である敦成親王が「あざや

か」になっていく姿をみて、政治上の敵にあたる伊周たちが大いに嘆くとされている。敦成親王誕生の章段から、『栄花物語』は『紫式部日記』をかなり引用しているが、日記引用部分は本文18のちょうど前で終わることが興味深いところである。『源氏物語』の作者と考えられる紫式部なら、「あざやか」を用いて皇統の人々を形容するとは考えにくいだが、しかし、『栄花物語』の作者と考えられる人々の中では、そういう用い方をする者がいることから、「あざやか」の使い方の幅広さが知られるだろう。本文19では、後三条院が「あざやか」でないことについて、関白の教通が気をもんでいるとされている。ここからも、『源氏物語』では、「あざやか」が皇統の人々には用いられないのに対して、その影響を受けているはずの『栄花物語』では逆に、「あざやか」が皇統の人々にとってあらまほしい性質であることが分かるだろう。

六、終わりに

以上の検討の結果をまとめる。「あざやか」は、『源氏物語』において、語義が大きく変化する言葉である。その変化の最大の特徴としては、「ををし」「すくよか」「およすげ」などの言葉と近接して主に男性人物の造型に用いられ、そして「なつかし」「なまめかし」「愛敬つく」などとされる人物と対照的に描かれている点が挙げられる。このような二項対立のような男性群像は、『源氏物語』以前の物語文学では見られないもので、『源氏物語』独特の造型法としてみとめられよう。そして、後期物語における「あざやか」の用いられ方は、明らかに『源氏物語』の影響を受け継いでいるものの、同じく『源氏物語』の影響下にある『栄花物語』では、帝を造型するときに、『源氏物語』と異なる「あざやか」の用いられ方が示されていることも留意された。

※本文の引用は、いずれも小学館の新編日本古典文学全集による。ただし、一部表記を改めた箇所がある。

注

- (1) 中村幸彦ほか編『角川古語大辞典 第1巻』（角川書店、1982年）。
- (2) 大野晋編『古典基礎語辞典』（角川学芸出版、2011年）。
- (3) 中西良一「源氏物語用語覚書——『あざやか』『けざやか』『さやか』等について——」（『和歌山大学学芸学部紀要・人文科学』13、1963年）。
- (4) 武山隆昭「『あざやか』の語義攷——『けざやか』との差異に触れて——」（『椋山女学園大学研究論集』10-2、1979年）。
- (5) 池田節子「『源氏物語』第二部の服飾——衣装の色および『あざやか』の意味するもの——」（河添房江編『王朝文学と服飾・容飾』、竹林舎、2010年）。
- (6) 伊井春樹編『源氏物語古注集成26 萬水一露 第三巻』（桜楓社、1990年）。
- (7) 築島裕編『訓点語彙集成 第一巻』（汲古書院、2007年）。
- (8) 石田茂『写経より見たる奈良朝仏教の研究』（東洋書林、1982年）。
- (9) 張玉書等（清）著、王引之校『康熙字典』（上海辞書出版社、2008年）。
- (10) 蕭統（南朝梁）編、李善（唐）注『文選』卷十九〔詩・補亡〕、胡刻本。
- (11) 楊炯（唐）『盈川集』卷三、四部叢刊景明本。
- (12) 澤瀉久孝ほか編『古典索引叢刊3 新撰字鏡』（全国書房、1944年）。
- (13) 正宗敦夫編『類聚名義抄 法下・僧上』（日本古典全集刊行会、1938年）。
- (14) 鈴木一雄「『源氏物語』の女性造形と“ゆかり”」（『物語文学を歩く』、有精堂出版、1989年）。
- (15) 鈴木一雄『夜の寝覚』（新編日本古典文学全集28、小学館、1996年）。

* 討論要旨

まず、司会のノット・ジェフリー助教から、本発表は人物に対して使用された「あざやか」の用例への検討であったが、使われる対象の違いで対立する関係が、人物に対するのではない、ものなどに対するあざやかの例をみると、同じように対立関係がみえてくるのだろうか、という質問があった。

発表者は、装束や調度品を形容する際にはそのような対立の関係はみられず、ただ、全くないとはいえない、例えば髭黒にも、装束に対して「なつかし」という描写がある。光源氏にはあまり「あざやか」という衣装の描写はないが、女房などはしゅっちゅう「あざやか」という描写をされている、と回答した。

相田満氏からは、『源氏物語』中の形容詞から人物造形について分類するというのはわくわくする内容であった、と評価しながらも、資料の使い方に関して、『源氏物語』にみられる「あざやか」の用例として『日本書紀』があがっているが、漢文資料である『日本書紀』に「あざやか」という異訓はどこにあったのか、と質問した。発表者は、『日本書紀』に関する用例は辞書類から得たものである、と回答した。相田氏は、この訓読みは『日本書紀』の古注釈などによっている可能性があるため、それをあげるのは問題があると指摘した。発表者は、ジャパンナレッジで調べてみると、たしかに小学館の『新編日本古典文学全集』では「あざやか」ではなく「センレイ」と訓読している。『日本書紀』の当該箇所がすべて「あざやか」と訳釈されているわけではなく、用例としてあげているのはたしかに問題があるかもしれない、改めて検討したい、と回答した。

つづいて相田氏から、古注釈の例として築島裕の『訓点語彙集成』から『大唐聖域記』の用例をひろっていると思うが、『源氏物語』の文脈で、訓が付随していたかどうかを考えておくべきではないか、と指摘した。『大慈恩寺三藏法師伝』は仏教注釈の訓をひいており、しかも訓点がつけられた年代は1099年、興福寺ということであり、古さという点で保証ができない。参考程度にあげる分にはよいかもしれないが、厳密性を考えると問題があるのではないか、今回の発表は仮説としては興味深いものであった

ため、以上のこともご検討いただきたい、と述べた。

発表者は、訓点については専門ではなく、訓点を扱うのは今回が初めてだったため、勉強不足のところもあった、また、『三蔵法師伝』は古代に流布しているものであったため、紫式部の父も所持していたのではないかという考えから、参考程度にあげたものであった、と回答した。